

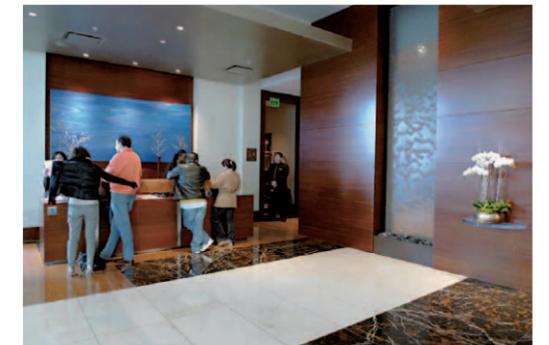
ザ・リッツ・カールトン ロサンゼルス AT L.A. LIVE



ロサンゼルス・ダウンタウンにある巨大複合施設、L.A. Liveにオープンした。手前にはJWマリオットの大きなロゴが見え、建物の4~21階を占めている



既存のリッツ・カールトンとの違いを表現するために、定番の黒地にライオンとネームの銘板ではなく、大きく斬新なデザインのロゴである



手前にソファセットがあるのだが、ブティックホテルを意識した隠れ家風のレセプションフロア。したがって大規模なロビーというものは無い

世界にはまだまだ日本人が訪れていないホテルがある。このコーナーではホテルエが知っておくべき「世界のリーディングホテル」を紹介する。これまで多くのホテル紹介本が出版されてきたが、そのほとんどが現地のホテルと事前に取材の連絡を取り合い、プロのカメラマンや通訳、そのほか大勢を連れ立っての大名取材であり、宿泊は省略といったことも多々であった。本連載では、著者自身が長年にわたる個人旅行中に自分の目で感じ取り、コメントを書き込み、自分のカメラで思いのままを撮ってきた写真を掲載する。

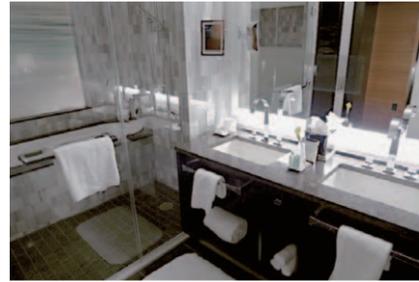
※本連載は毎月2・4週号掲載



23階のかなりのスペースをクラブラウンジとしてゲストに提供し、1日5回のフード&ドリンクのプレゼンテーションがある



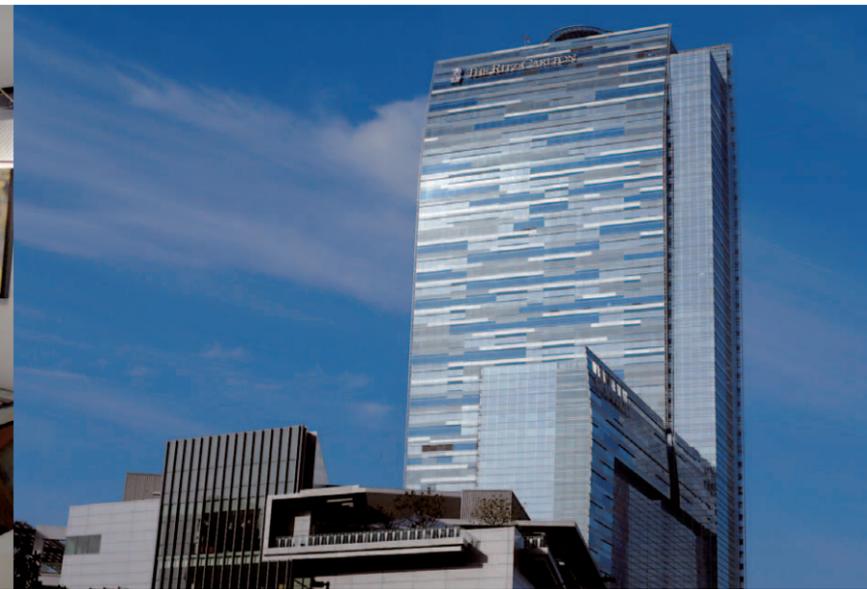
23階にあるクラブラウンジのエントランス。米国ではこの手のラウンジドアは閉まっているのが普通で、ゲストはアクセス・キーで開ける方式だ



客室を特徴付けるヒップでクールな感覚のバスルーム。シャワーブースとバスタブが一体化した形状で、ビルトインのミラーTVもスマートだ



ブティックホテルの感性と5ツ星ホテルのホスピタリティをコンセプトにした、コンテンポラリー感覚が漂う客室。この部屋はクラブフロア・デラックスの名称で約42㎡の広さがある



カリフォルニアの青い空にそびえる54階建てのザ・リッツ・カールトンL.A. Live。22~26階がホテル客室部分で、27~52階は総戸数224戸の超高級レジデンスが占めている

これまで荒廃していたロサンゼルス市中心部をよみがえらせる画期的な施設が誕生した。L.A. Liveという名称の巨大エンターテインメント・コンプレックスだ。ロサンゼルス・コンベンション・センターとステイブルズ・センター(バスケットボールのLAレイカーズやアイスホッケーのLAキングスの本拠地)に隣接した好立地に、ノキア・シアター、グラミー・ミュージアム、ESPNゾーン、14スクリーンの映画館、12のレストラン、そして最後にリッツ・カールトンとJWマリオットのホテル開業をもってこの巨大複合施設は完成した。

疲弊していたダウンタウンはこれにより見事に復活を果たし、問題であった治安も徐々に改善してきた。クルマ社会の典型だった街も地下鉄網が一応完成し、大動脈のウィルシャーBlvdには最新鋭の2両連結バスが運行を始めた。一昔前であれば一人歩きなど考えられなかったダウンタウンも小ぎれいになり、今回は筆者もゆっくり中心部の散歩を楽しんで来た。夜間の一人歩きはまだ危険だが、昔のダウンタウンを知る者にとって画期的な大変革と言える。詳しくは筆者ホームページEdition 7のロサンゼルス特集を参照されたい。

そんなロサンゼルスで一番ホットな場所に、2010年4月にザ・リッツ・カールトンL.A. Live(以下RC/LA)がオープンした訳である。54階建てタワーの22-26階部分に15のスイートを含む全123室を擁するホテルだ。27階以上の上層階は「The Ritz-Carlton Residences at L.A. Live」の超高級レジデンスである。RC/LAのコンセプトは、客室数を抑えたブティックホテルの感性と5ツ星ホテルのホスピタリティである。今までのクラシカルで重厚な雰囲気とは対極の、コンテンポラリー感覚あふれるクールでヒップなインテリアになっている。リッツ・カールトンは1998年以来マリオット・インターナショナルの傘下にあるが、2002年にCEOのホルスト・シュルツ氏が退任した後に、このようなJWマリオットとのコラボレーションの傾向が多く見られるようになった。

RC/LAにはアカデミー賞公式シェフのウルフ・ギャング・バック氏がプロデュースするレストラン&バー「WP24」がありお勧めだ。そのほか趣向を変えた5つのレストラン&バーもあるのだが、こちらはJWマリオット側にあり共有施設という形を取っている。また750㎡の広さを誇るモダンな「The Ritz-Carlton Spa」、ルーフトップ・スイミングプール、フィットネスセンターなど施設は充実している。特にクラブラウンジのゆったりとしたレイアウトとホスピタリティは注目に値する。スタッフは非常にフレンドリーで、一人一人に可能な限りゲストの名前で声を掛け、要望を聞いて回り、一人旅のゲストとは雑談にまで応じる姿は新鮮に映った。

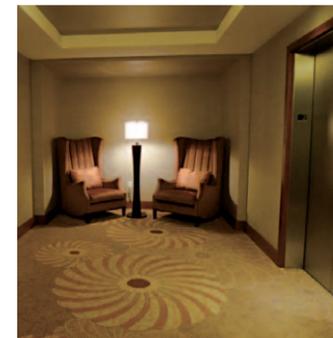
おそらくブティックホテルのコンセプトを標榜した初めてのリッツ・カールトンと思われるが、この新しい試みが今後どう展開して行くのか大いに楽しみである。



26階にあるルーフトップのスイミングプール。ちょうど最初の写真、JWマリオットのロゴ部分屋上にある。プール手前は多くの専用ベッドを備えたリラクゼーション・スペースになっている



リラクゼーション・スペースには豪華なカバナもあり、ここでスパ・トリートメントも頼める



23階にあるスパ入り口前のエレベーターホール。コンテンポラリーの中にもクラシカルなリッツ・カールトンの雰囲気も残っている



「The Ritz-Carlton Spa」のレセプションフロア。今までのリッツ・カールトンの概念を変える明るく斬新なデザインである



最近オープンするリッツ・カールトンは、このようにJWマリオットとのコラボレーションが多い。ちなみに双方は同じ番地を共有している



筆者 小原康裕
ホテルジャーナリスト。慶応義塾大学法学部法律学科卒。74年Munich Re入社。85年築地原健代表取締役。2001年投資顧問会社原健設立、代表取締役CEO。
※現在、著者のホームページで「世界のリーディングホテル」を連載中。多くの美しい写真と興味深いコメントで、世界中のホテルとそれら関連都市を紹介。ホテルだけでなくさまざまなオリエンタルエクスプレスなど鉄道関係の掲載、季節刊行で世界遺産の案内などさまざまな情報が得られる。
www.jhrca.com/worldhotel